

インターネットメディア内での他者からの 反応が怒り感情表出に与える影響

——自己愛傾向の高さの観点から——

京 井 志 帆

問題と目的

自己愛の高さとインターネットメディアの利用状況やインターネットメディアへの回避と攻撃性との関連が、既に研究されている。怒りの感情については、自己が満たされないと怒りの感情が高まることが明らかになっている。そこで本研究では、インターネットメディア内で自己愛が傷つけられた時の怒りに焦点を当てた。

本研究では、インターネットメディアでの怒り表出について、他者から受ける反応によって、怒り感情と自己愛傾向の強さに差異があるのか調査することを目的とした。

方法

本調査は2012年11月中旬から12月上旬に、大阪府内の私立大学の講義前もしくは講義後に、質問紙調査票を配布し、男性88名、女性112名の計200名が有効回答であった。質問紙は、インターネット利用に関する項目、架空の怒り喚起場面に他者が反応することによって生じる、協力者の怒りの状態を尋ねる項目、調査者の特性的な怒りについての項目、自己愛に関する項目、によって構成されている。

結果と考察

分散分析の結果、怒りの特性において自己愛の主効果が認められ ($F(1,196) = 21.01, p < .01$)、自己愛全体得点が高い人は、特性的に有意に怒り易いことが明らかとなった。怒りの表出方法については、怒りの表出因子と怒りの抑制因子において自己愛全体得点の主効果が認められ (怒りの表出: $F(1,196) = 11.17, p < .01$ 、怒りの抑制: $F(1,196) = 13.89, p < .01$)、自己愛が高いと、明らかに怒る、一方で感じた怒りを抑え込みやすいことが明らかとなった。

自己愛が高いと、怒りの特性が高いという結果が示された点について、特性的な怒りについての質問項目には、自己愛的特徴を持つ者が、不満喚起場面に遭遇した際に感じる怒りが反映されたものと推測される。不満喚起場面で、自己愛者が感じる怒りが、特性的な怒りとして反映されやすい結果となったと推察される。また、怒りの表出方法の尺度には、自尊心が傷つけられたり、自己愛の高い者が他者の視線を意識したりすると考えられる状況が含まれている。この点から、自己愛傾向の高い者は、怒りの表出時に、あからさな怒り表出を抑制する一方で、防衛が崩されることで傷つきが起きる際に、怒りを表出し易いと推測される。